

日田は昔から桃源郷であった。

はじめに。

東北大震災後、日本は劇的に大きな変化の渦に巻き込まれている。東北大震災は、戦後の発展とは何だったのかという問いかけにも見える。

歴史は繰り返すという。今、日本で起きている現象は何を意味するのか？そして、その現象をどう生き抜いて行くのか。それを、謎解くものは、縄文時代から日本人が生き抜く上で、育んできた「叡智」そのものであるであろうと思われる。

日本も中央集権の結果、地方の独自性が消し去れ、どこもここも同じマチが生まれ、郷土愛さえも薄れていった。

桃源郷とは、日田という土地の優れたものを活かし自然と共生し、郷土に誇りを持ち豊かに生きるというテーマであり、日田桃源郷こそが世界遺産への道のりでもある。

最後に、「動くこと」これしかない。

桃源郷とは

桃源郷の初出は六朝時代の東晋末から南朝宋にかけて活躍した詩人・陶淵明（365年 - 427年）が著した詩『桃花源記 ならびに詩』である。



頤和園の長廊にある蘇式彩画、「桃花源」

晋の太元年間（376年 - 396年）、武陵（湖南省）に漁師の男がいた。ある日、山奥へ谷川に沿って船を漕いで遡ったとき、どこまで行ったか分からないくらい上流で、突如、桃の木だけが生え、桃の花が一面に咲き乱れる林が両岸に広がった。その香ばしき、美しき、花びらや花粉の舞い落ちる様に心を魅かれた男は、その源を探ろうとしてさらに桃の花の中を遡り、ついに水源に行き当たった。そこは山になっており、山腹に人が一人通り抜けるだけの穴があったが、奥から光が見えたので男は穴の中に入っていった。

穴を抜けると、驚いたことに山の反対側は広い平野になっていたのだった。そこは立ち並ぶ農家も田畑も池も、桑畑もみな立派で美しいところだった。行き交う人々は外の世界の人と同じような衣服を着て、みな微笑みを絶やさず働いていた。

男を見た村人たちは驚き話しかけてきた。男が自分は武陵から来た漁師だというとみなびっくりして、家に迎え入れてたいそうなご馳走を振舞った。村人たちは男にあれこれと「外の世界」の事を尋ねた。そして村人たちが言うには、彼らは秦の時代の戦乱を避け、家族や村ごと逃げた末、この山奥の誰も来ない地を探し当て、以来そこを開拓した一方、決して外に出ず、当時の風俗のまま一切の外界との関わりを絶って暮らしていると言う。彼ら

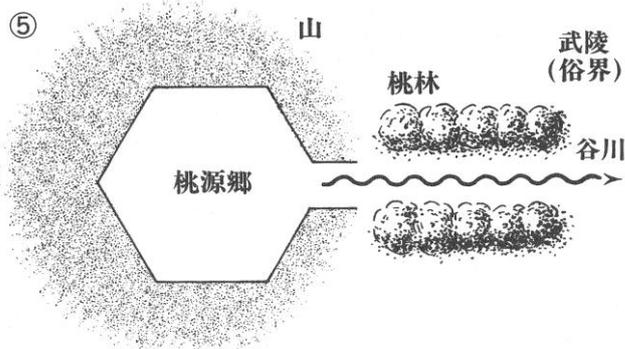
は「今は誰の時代なのですか」と質問してきた。驚いたことに、ここの人たちは秦が滅んで漢ができたことすら知らなかったのだ。ましてやその後の三国時代の戦乱や晋のことも知らなかった。

数日間にわたって村の家々を回り、ごちそうされながら外の世界のあれこれ知る限りを話し、感嘆された男だったが、いよいよ自分の家に帰ることにして暇を告げた。村人たちは「このことはあまり外の世界では話さないでほしい」と言って男を見送った。穴から出た男は自分の船を見つけ、目印をつけながら川を下って家に帰り、村人を裏切ってこの話を役人に伝えた。役人は搜索隊を出し、目印に沿って川を遡らせたが、ついにあの村の入り口である水源も桃の林も見付けることはできなかった。その後多くの文人・学者らが行こうとしたが、誰もたどり着くことはできなかった。

風水と桃源郷

実は桃源郷と風水の理想とされる土地の理想が同じである事は知られてない。

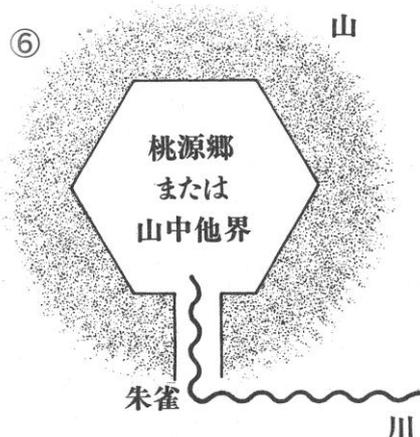
古代世界において大地そのものが地母神の子宮とみなされ、その中でも特別に祝福された理想の子宮が龍脈の融結点だと観念されていた。



この発想は理想郷とも密接に結びついており、中野美代子氏が模式化した図では、周りを山で囲まれて、一方だけに道や川が流れるものである。図⑤は桃源郷をイメージし図⑥は風水の理想郷をイメージしている。

古代人はこうした壺状の地形の中に母なる子宮を獲得し、そこから生まれ同時に帰って行く（他界・霊界）ところでもあり、天に通じていたものとされていた。

風水（ふうすい）は、古代中国の思想で、都市、住居、建物、墓などの位置の吉凶禍福を決定するために用いられてきた、気の流れを物の位置で制御する思想で、日本でも有名なのは京都であろう。794年桓武天皇の時代に「平安京」として造営された、当時の国家プロジェクトとして、「風水」による方位学によって選ばれた吉相の場所であったといわれている。



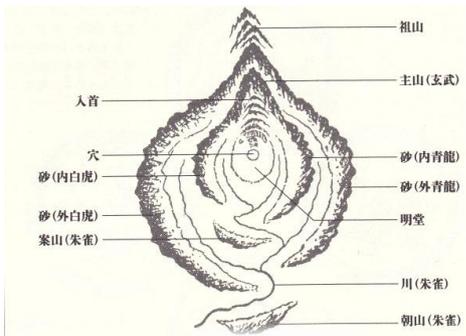
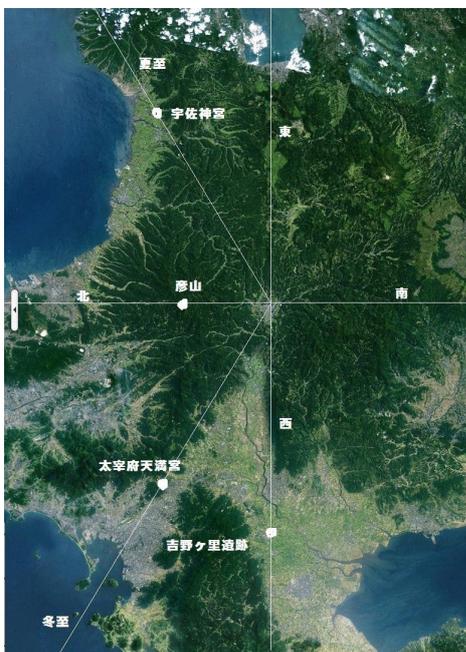
日田の風水と母神と太陽信仰

桃源郷の別の意味では「隠れ里」という意味も含まれるが、日田古代の関係の本を読んでいると奥津城と表現されている事が多い。これもある意味、風水などの影響からくるものであろう。

日田の地形です。

左図（日田の会所山）では、筑紫平野が広がり、狭い山道を入れていくと日田と盆地に入ってくる様子（桃源郷的）がわかる。

また下記の写真は日田の平野部です。まるで子宮の格好している。



左図は、風水の理想の土地であり、日田の地形とも似かよっている。奈良も、山と神社と遺跡が、太陽信仰や風水で成り立っているが、日田の方位をしてみると、日田の太陽信仰の東西、夏至、当時のラインを結べば、北部九州と日田の意味するものがみえてくる。

今回のフォーラムの目的は「桃源郷」であり、大地信仰の母なる土地で、自然と共生し、未来型のまちづくりを物語化するものである。

「日田桃源郷物語」の手段として、自然環境、エネルギー問題、地域産業、観光、林業、農業という自然を活かした循環型社会を構築するものである。その先きには、日田世界遺産への道が切り開ける。

